

山形県埋蔵文化財調査報告書 第25集

# 庄内藤島城跡

—河川改修にともなう外郭西側の  
緊急発掘調査—

1979.10

山形県教育委員会

山形県埋蔵文化財調査報告書 第25集

# 庄内藤島城跡

—河川改修にともなう外郭西側の  
緊急発掘調査—

昭和54年10月

## 序

藤島城は、庄内の歴史にたびたび登場してくる名城で、南北朝時代北畠顯信がここに拠ったとも伝えられ、元和元年の廃城まで何回も争奪がくり返されてきました。まさに、藤島城を制するものは庄内を制すとも言われる地の利をえた重要な城であったように思います。今はわずかに往時のおもかげをとどめるにすぎませんが、この度、城の西側にあり要害の一部でもあった藤島川の河川改修工事が行われることになりました。この河岸一帯は降雨期にいつも洪水にあい水害をもたらすので、川巾を広げ築堤を行うことは地元でもかねてから要望してきたことでもあります。

この事業を前にして山形県土木部河川課と協議を重ねた結果、工事にかかる外郭西側を事前に発掘調査することになり、新たに今年度設置された庄内教育事務所埋蔵文化財調査室が担当し、6月下旬より緊急調査を実施することになりました。部分的な調査ではありましたが、いろいろの新しい事実が判明したようあります。これからの城館跡研究に一つの手がかりとなれば幸いと思います。

本調査にあたり、県土木部河川課及び庄内支庁河川改良課、地元の藤島町教育委員会、県立庄内農業高等学校の各位の御協力に深甚の謝意を表します。

昭和54年9月

山形県教育委員会教育長

吉村敏夫

# 例　　言

1. 本報告書は、山形県が実施する中小河川改良事業京田川改良工事にかかる東田川郡藤島城跡外郭西側の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は山形県教育委員会が主体となり、庄内教育事務所埋蔵文化財調査室が担当した。
3. 発掘調査は昭和54年6月23日より7月9日まで、実働12日間である。
4. 発掘調査は川崎利夫（庄内教育事務所埋蔵文化財主査）が担当し、佐藤義信（県教育委員会文化課）の協力を得た。
5. 実測図・地形図・拓本等には、それぞれスケールを示した。また拂図中の記号で、S Fは土壘を示している。
6. 地形図（map）は、庄内支庁河川改良課より提供していただいた。
7. 藤島城内郭の測量は鶴岡市みどり町、鈴木測量設計事務所に委託して実施した。
8. 本報告書の執筆、掲載写真の撮影、図面作製、編集は主として川崎利夫が行ったが、「3. 藤島城とその変遷」は長橋至が執筆し、全般については野尻侃の協力を得た。

## 庄内教育事務所埋蔵文化財調査体制一覧

庄内教育事務所長 小松成夫

同 次長 佐藤良一

総務課長 菅原俊夫 総務主査 菅原猛

社会教育課長 大沼文雄 文化財担当社教主事 村岡敏

埋蔵文化財調査室（酒田市禹羽町1ノ21）

埋蔵文化財主査 川崎利夫 同技師 野尻侃

同嘱託 長橋至 中村敏三 原田美和子

## 目 次

1. はじめに.....	1
2. 藤島城の位置と環境.....	1
3. 藤島城とその変遷.....	3
4. 藤島城の内郭.....	7
5. 外郭西側の調査.....	8
6. 出土遺物.....	17

## 挿 図 目 次

第1図 藤島城とその周辺の遺跡分布図.....	2
第2図 藤島城図（「筆濃餘理」による）.....	6
第3図 藤島城内郭現況測量図.....	折込み
第4図 藤島城外郭西側地形図及びトレンチ・グリッド配置図.....	9
第5図 藤島城外郭西側トレンチの土壘平面図.....	11
第6図 3トレンチ土壘（SF-1）平面図及び断面図.....	12
第7図 各トレンチ断面図.....	13
第8図 越前焼・珠洲焼系中世陶器の拓影.....	16

## 図 版 目 次

図版1 藤島城附近の航空写真	図版8 SF-2の土壘
図版2 藤島城の内郭	図版9 SF-3の土壘
図版3 大手門と内郭北側土壘	図版10 SF-4の土壘
図版4 内郭と西側土壘	図版11 SF-1の土壘
図版5 外郭西側発掘地の全景	図版12 法眼寺境内裏の土壘
図版6 発掘調査の状況	図版13 出土した土器・陶磁器類
図版7 SF-2、SF-3、SF-4の 土壘	図版14 SF-1の土壘より出土した管

## 1. はじめに

東田川郡藤島城は、南北朝時代から江戸時代初期最上氏が改易になるまで、庄内の歴史の上にしばしば表わされてくる名城の一つである。藤島川を利用した平城で、今内郭の土塁と水濠の一部を明瞭に残している。

昭和54年度に、県営の事業として河川改修工事が行われることになり、藤島城西側の外郭の一部も工事区域内に含まれるので、昨年10月に山形県教育委員会文化課において現地確認調査を行い、54年度の発掘調査予定地のなかに組み入れた。

藤島川は羽黒山系に源を発して庄内平野東南部を北流し、藤島の町の中央部を流れ、酒田市広野の東において京田川と合流して、さらに日本海の河口附近で最上川と合する。藤島本町に入る前に大きく蛇行するが、雨季にはいつも洪水になり数年に一度は水害に見まわれるという。当初発掘調査は、7月から8月にかけて実施する予定であったが、梅雨期に入る前に調査を完了してほしいとの地元の強い要望があり、庄内支庁河川改良課と庄内教育事務所との間に再三協議が行われた結果、庄内教育事務所埋蔵文化財調査室が調査を担当し、山形県教育庁文化課より来援をえて、6月23日より7月20日までの予定で実施することになった。発掘調査は庄内教育事務所埋蔵文化財主査川崎利夫、県教育庁文化課佐藤義信があたり、13名の平形地区の作業員をもって発掘作業をすすめた。折から梅雨期に入り連日の雨にたたられ調査は難行したが、藤島町教育委員会の絶大な援助をえたため、予定より早めに7月9日をもって発掘作業を完了した。

なお本発掘と併行して、藤島城内郭の測量図作製を委託して実施した。

## 2. 藤島城の位置と環境

藤島城は、東田川郡藤島町大字藤島字古樋跡にあり、藤島の町なみは藤島城を中心に発達した小城下町である。庄内平野の東南部を占め、水田地帯に発達した集落で、藤島城は内郭の土塁と濠の一部を残すほかは、昔の面影をとどめず外郭の大部分は県立庄内農業高等学校的敷地や民家となっている。内郭の西側140mのところを南から北へ大きくカーブをえがきながら藤島川が流れているが、これは自然の外濠をなしている。藤島川をはさんで対岸にも「向橋」と称する館があったといわれ、「筆濃餘理」にも記載され土塁や空塗があったらしいが、いまは畠地や宅地となっている。いつの時代か不明であるが、藤島城の前衛陣地があったのであろう。



第1図 藤島城とその周辺の遺跡分布図

また藤島城の南方 500m のところにある法眼寺は藤島城最後の城主新闇因幡守の菩提寺であるが、ここにも藤島川に沿って土壘が残り「法眼寺館跡」(No1714) として遺跡地図に登載されている。おそらく江戸初期、新闇因幡の時代の藤島城防禦施設であったと思われる。法眼寺の東にある種耕院境内北側にも濠跡があったといわれるが、今は痕跡がない。藤島川の上流 1,800m へだたった古郡は古代郡衛があった地に擬せられたが、ここに「古郡館跡」(No1751) があり、新闇因幡は当初この館におったといわれ藤島城の支城であった。さらに藤島城の下流 1,000m のところに「平形館跡」(No1721) がある。これも藤島城の支城で、昭和51年県営圃場整備にかかるために発掘調査を行ったところ多くの建物跡、溝跡、井戸跡などがあらわれ中世陶器などが出土した。土壘は東西45間、南北73間あったといわれ南北の土壘は今も残っているが、これは昭和52年県指定史跡となり内郭部分も煙突として圃場整備から除外されて保存されることになった。館主は金氏（平賀氏）で金野館ともいわれるが、出土物からみて鎌倉時代からの館跡である。

その他、藤島の東に「添川館」、「閑根館」、西に「柳久瀬館」があるが、何れも藤島城に関連する館跡と思われる。今は、ほとんど痕跡すらとどめないものが多い。藤島城をめぐ

っては、南北朝時代から文明の土佐林、武藤の合戦、天正の羽越合戦、検地一撲など打ちつく戦乱があったが、その際に築かれた館であったと思われる。

藤島本町より藤島川をはさんで東北方の水田地帯は平安時代の集落跡が連なり、平形A～D遺跡となっているが、先年圃場整備に先立って発掘調査が県教委文化課によって行われた。多くの掘立柱の建物跡、倉庫跡、墨書き土器、木筒の一部などが検出され、古代の官衛跡の可能性がつよい。藤島本町の周辺に位置する古郡、渡前、平形地区の水田地帯は和銅5年（712）に出羽国が建設された際の国府跡や国分寺、田川郡衛があった地として古くから注目されてきたが今のところ奈良時代まで遡る遺跡・遺物の出土はなく、明確さに欠けるが平安時代に何らかの公的施設があったのではないかと思われる。

本発掘調査に併行して、藤島町教育委員会が主体となって行った長沼地区勝楽寺遺跡において良好な中世集落跡が発掘され、珠洲焼系の陶器や中国産青磁片などが出土した。庄内平野川南東半部を占める藤島町とその周辺は、藤島川の舟運などを通じて古代から中世にかけての政治的中心地の観を呈したのであった。

### 3. 藤島城とその変遷

往古より南北朝の争乱、戦国時代を通じ元和元年に廃城となるまで庄内の戦略上の拠点として藤島城は多くの戦禍を受けた。これらに関する記録は意外に少なく『出羽國風土略記』に「(藤島城ハ) 藤島村の西にあり、構手堀跡等僅に残れり。構の内には八幡宮あり。館經營の年季其主性名詳ならず」とあるように、断片的な記録によりその変遷を追わざるを得ない。便宜上、藤島城をめぐる情勢として次の3期に分ける。

- (1) 南北朝争乱
- (2) 室町中期～本庄繁長の庄内侵入
- (3) 上杉景勝の庄内支配～廃城

#### (1) 南北朝争乱

藤島城が歴史に登場するのは南北朝争乱の頃からである。全国をおおうこの動乱は庄内でも無縫ではあり得なかった。なかでも藤島城は庄内における南朝側の重要な拠点として、その中心的位置を占めていた。これは、庄内では鎌倉時代の初めより大泉荘地頭の武藤氏と羽黒山伏の間に所領をめぐっての対立があり、北朝側の武藤氏に対抗し羽黒山伏は南朝につくもののが多かったであろうと推測される点、立地的には前記の通り庄内のほぼ中心に位置し道路が比較的古代より整備され、かつ穀倉地帯で戦略上の好条件を備えていること、加えて元弘の変（1331）に連座した葉室光顯が出羽に流され、元弘3年（1333）出羽守に

任せられ藤島国府に赴任していたこと等の理由によるものと考えられる。これらを背景に庄内で南北朝の争乱が活発化するのは、いわゆる中先代の乱（1335）を契機としてである。この乱の最中、光顕は凶徒に倒れ嫡子光世が国司として藤島に赴いた。尊氏は奥羽の南朝方に対処するため斯波家長を奥羽管領に、上杉憲顕を越後守に任命し出羽国府に对抗させ、さらに余目に相馬光泰を配し、ここに庄内も南北朝の争乱の様相を呈する。

国司光世、堀河具信は興国2年（1341）藤島城に入る。同5年（1344）上杉憲顕の攻撃に藤島城は北朝方に陥った。この戦いで光世は戦死したと伝えられ翌年、光世の弟、光久が国司として藤島に入っている。正平2年（1347）奥州を追われた北畠顕信は守永親王を奉じ出羽国に入り、羽黒山富田坊衆徒が堅守していたという田川郡立谷沢城に挺った。同5年（1350）より約5年間、いわゆる「観応の擾乱」がおきた。奥羽においても尊氏方と直義方の抗争がみられ、この機に北畠顕信を中心とする南朝方は出羽国から陸奥国多賀城にまで勢力を延ばした。しかし足利氏の内訌の解決により形勢は逆転し再び顕信、守永親王は出羽国に退き藤島城に挺り、正平11年（1356）藤島城で兵を挙げたが北朝方の優勢は動かしえず藤島城は陥った。守永親王の消息は以後途絶えるという。顕信はその後も鮫海・由利郡付近に潜伏していたらしく正平13年8月30日付の「北畠顕信寄進状」が大物忌神社に残っている。藤島城及びその周辺における南北朝争乱は以上のような経過をたどった。

## （2）室町中期～本庄繁長の庄内侵入

文安2年（1445）『羽黒山在庁年代記』に「羽黒山本社当国主土佐林和泉守殿御建立」の記事がみえ、羽黒本社を修造した土佐林和泉守氏光を当国主と記している。恐らく土佐林氏の勢力は藤島を中心として、庄内でも有力なものがあったのであろう。土佐林氏の出自は2,300坊あった羽黒山の藤島学頭宮目寺衆徒の中から出た豪族といわれている。『大淵記』に正平12年（1358）8月の記事として、土佐林道俊誘殺の件が記されているが信憑性はうすい。

土佐林氏は、庄内で戦国大名に成長しつつあった武藤氏と、しばしば対立があった。年代は明確ではないが、寛正5年（1464）を降らない時に一応武藤氏の配下となつたと考えられる。（『鷹川親元日記』に武藤淳氏上洛の折、土佐林某を武藤氏の被官と記されている）だが、羽黒山を背景として勢力を伸ばす土佐林氏に対し文明9年（1477）武藤政氏はこれを藤島城に攻め降し、同時に羽黒山別当職も奪った。土佐林氏はこの戦いで大きな打撃を受けるが、武藤晴時の方には土佐林某は「肱股の臣」として仕えている。天文1年（1532）武藤氏の庶族である砂越氏維は大宝寺を攻め灰燼に帰せしめ、武藤氏は大山の尾浦城に以後拠ることになる。この時、土佐林氏も藤島城を攻撃され、しばらく土佐林氏も旧領藤島を離れていた模様である。

武藤義増、義氏の時代、藤島城主は土佐林禪棟（能登守）であった。この時期、土佐林氏は臣札を武藤氏に示してはいたが上杉氏、最上氏と密接な関係を保ち実質は「独立領主」として自負していたらしい。永禄11年（1568）越後の本庄繁長が上杉氏に対し反抗を策謀した折、義増は繁長と同盟するが謙信の果断を恐れた義増はただちに和を請うている。その間、禪棟は謙信に忠節を尽くし、その後も謙信に密着し勢力を拡大していた。このため義増の跡を継いだ義氏との対立は激化の一途を辿り、元亀1年（1570）9月、謙信の調停で大浦において和解が成立した。しかし禪棟らは証言にあい大浦城を去り横山城に遁走し、ここに火を放った。ここに至り義氏は禪棟を攻め、土佐林宗家は滅亡した。その後「藤島城には義氏の甥、兵庫頭義興が配された。同時に天正7年（1579）武藤宗家が世襲してきた羽黒山別当職は義興に譲られた。

天正11年（1583）義氏は高坂城主前森藏人、酒田龟ヶ崎城主東禅寺筑前守勝正ら（前森は後に東禅寺筑前と称したとする説もある）最上義光と通謀したものにより不意に尾浦城を攻められ自刃する。藤島城主義興は義氏の跡を継ぎ尾浦城へ入るが、義光の庄内侵攻は義氏の死を契機にその激しさを増すことになる。この時期、藤島城は義興方の重要な拠点として小国彦次郎が警固していた。義興が小国に充てた書状が高坂文書として『山形県史古代中世資料1』に所収されている。一部抜粋してみる。「就今度之兵乱、藤嶋之城警固之儀一事に其方に馳入…云々 天正十四年五月二日 義興（差出人） 小国彦次郎殿（受取人）」

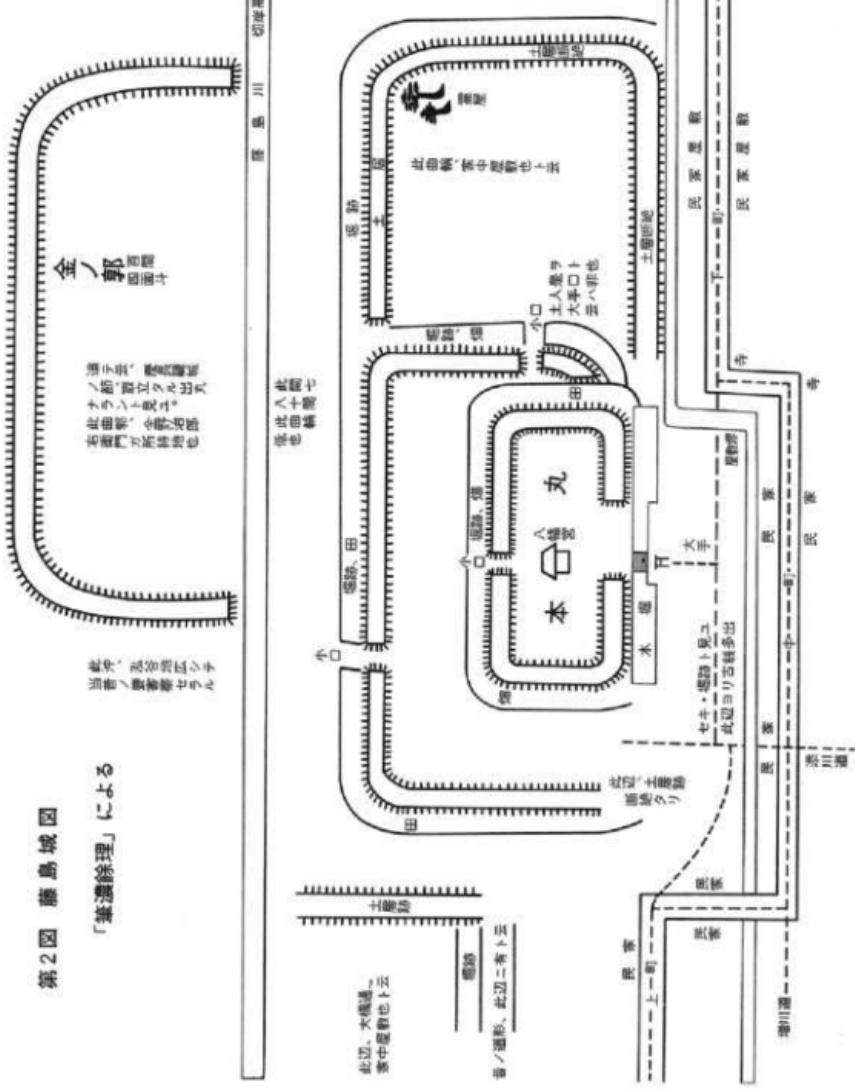
最上義光は天正15年（1587）庄内を攻撃し、庄内一円は一応義光の掌中に帰した。（尾浦城は陥ら義興は自刃している）武藤家に次男義勝を養子として送っていた本庄繁長は越後へ落ちた義勝と共に景勝の援軍を得、翌年八月庄内に侵攻し、最上方である庄内軍と千安十五里ヶ原で激戦を演じ圧勝する。しかし豊臣秀吉の大名間の私斗を禁じる施策に反したため、義勝は信濃に移され庄内は上杉景勝に与えられた。

### （3）上杉景勝の庄内支配～廢城

景勝は藤島城に栗田刑部を配し、いわゆる「太閤検地」をおこなった。太閤検地はその歴史的意義は別として、過去に類をみない厳格さをもっておこなわれたため農民・土豪層・寺社等、各階層が不満を持ち一揆の様相を呈した。平賀善可（平形館主の一族）を大将とする数千の土民は狩川・藤島・横山・大宝寺を攻め大浦城に迫ったが景勝の援軍により一揆は追散された。藤島城では金右馬允が楯築し、翌天正19年（1591）迄頑強に抵抗した。出丸として金野丸が築かれたのはこの時であろう。金右馬允は武藤氏に仕え功績のあった地侍であり、庄内の一揆はこれら地侍層を中心としておこされたらしい。なお本庄繁長、義勝父子は一揆煽動の疑で大和へ流されている。

第2圖 藤島城図

「筆遺餘理」による



慶長3年（1598）藤島城には景勝の臣、木戸玄斎が配されている。上杉氏会津入部のためである。同5年（1600）最上氏の川南攻略に際し、安倍氏重が軍備をそろえるため藤島城に入っている。翌年、庄内は関ヶ原の戦の功として最上氏に加増され同8年、藤島城最後の城主、新闇因幡守久正が城下7,000石で入った。南北朝の争乱よりめまぐるしい戦禍をくぐり抜けた藤島城はこれより12年後、元和1年（1615）幕命により破壊され廃城となつた。

## 4. 藤島城の内郭

藤島城の面影は、いま内郭をとりまく土塁と濠の一部にとどめるにすぎない。土塁上には、大木が生い茂っている。内郭には八幡神社があり、東側から土塁の間を通っていく参道の入口が大手門であった。形態はかなり変っているにしても、現況を実測して正確な測量図面を作製するために鶴岡市鈴木測量設計事務所に委託した。

内郭の西側と南側に、いま土塁はないが一部に僅かな高まりがあること、内郭の部分が周囲よりやや高くなっていることよりして四周が土塁で囲まれていたものと推測される。内郭は東西40m、南北60mと推定され、南北に長い長方形の郭で面積は2,400m<sup>2</sup>である。大手門付近の標高は11.6mであり、土塁は高さ2m前後、巾15m及至17mである。土塁の北西隅はさらにこれよりも1m高く、頂部は平坦になっているが四隅に物見の施設である角櫓などが置かれた可能性がある。土塁の部分には建物があったと思われるが、どのようなものか不明である。発掘すれば、それらの痕跡があらわれるであろう。この内郭は近世城郭の本丸であるが、他の例に比べて、さして広くはない。

土塁の外側は水濠になっている。東側にその一部を残すのみであるが、現在巾13m程である。「筆濃餘理」に藤島城図が載っている。明治初年すでに東側を除く三方は田や畠となっているが「堀跡」となっており、四周濠に囲まれていた様子をうかがうことができる。そして、その外側がかなり広い曲輪になっている。現在、庄内農業高等学校の敷地の大部分である。「二の丸」ということになろう。本丸も二の丸も藤島川の自然堤防上にあり、一段高い台地になっている。台地の突端には土塁がめぐらされていたらしい。「筆濃餘理」によれば台地の下、つまり土塁の外側は再び濠跡になるらしいが、この度の調査では濠跡を明瞭に検出できなかった。従って、この部分に深い水濠があったとは思われない。二の丸の土塁は庄内農高の敷地と果樹園のため削平されたらしく、その痕跡を残さない。ただ果樹園南側においてやや高くなり、それらしい痕跡を把握できるのみである。

二の丸の台地の下は現在約1mほど低くなり、西側は藤島川の岸につづく。西側を除く

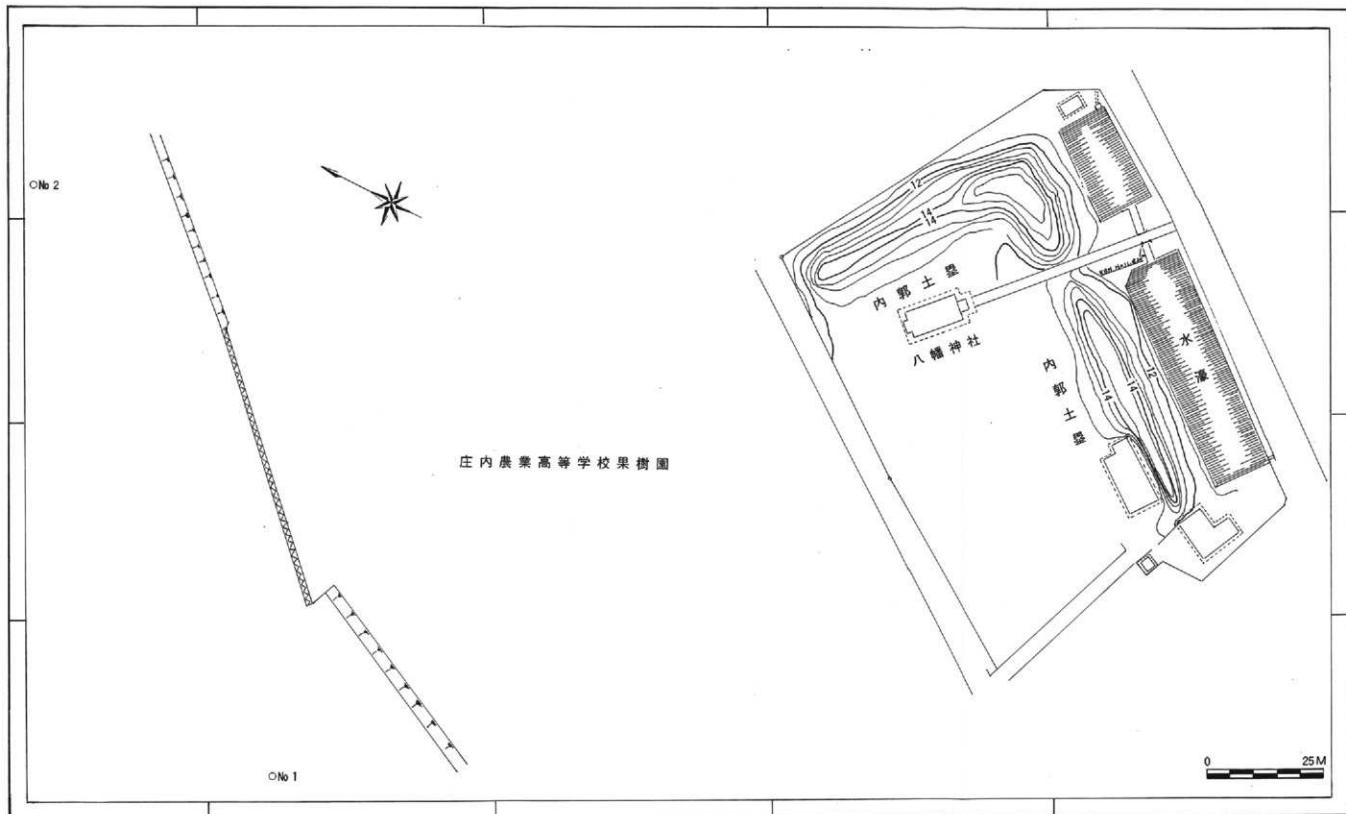
他の三方は現在民家となっており、ほとんどその痕を残さない。ただ台地突端の土壘は南北に伸び、藤島城跡の平面プランは長方形であったことが「筆濃餘理」によってもうかがうことができる。二の丸台地から藤島川までは65及至70mの距離で低位段丘をなしているが「筆濃餘理」には「此間七八十間此曲輪低也」と注記がある。藤島川を西側の防禦線とし、この度発掘した外郭西側は低い曲輪をなしていたのであろう。従って、このあたりは三の丸ということができるであろう。

## 5. 外郭西側の調査

この度河川改修工事にかかるのは外郭西側で、二の丸台地の下方より藤島川にいたるところである。つまり藤島川の岸辺の低地で「筆濃餘理」に「低き曲輪」として記載ある場所で、おおよそ南北に240m、東西60m、総面積14,400m<sup>2</sup>が調査対象地である。(第4図)

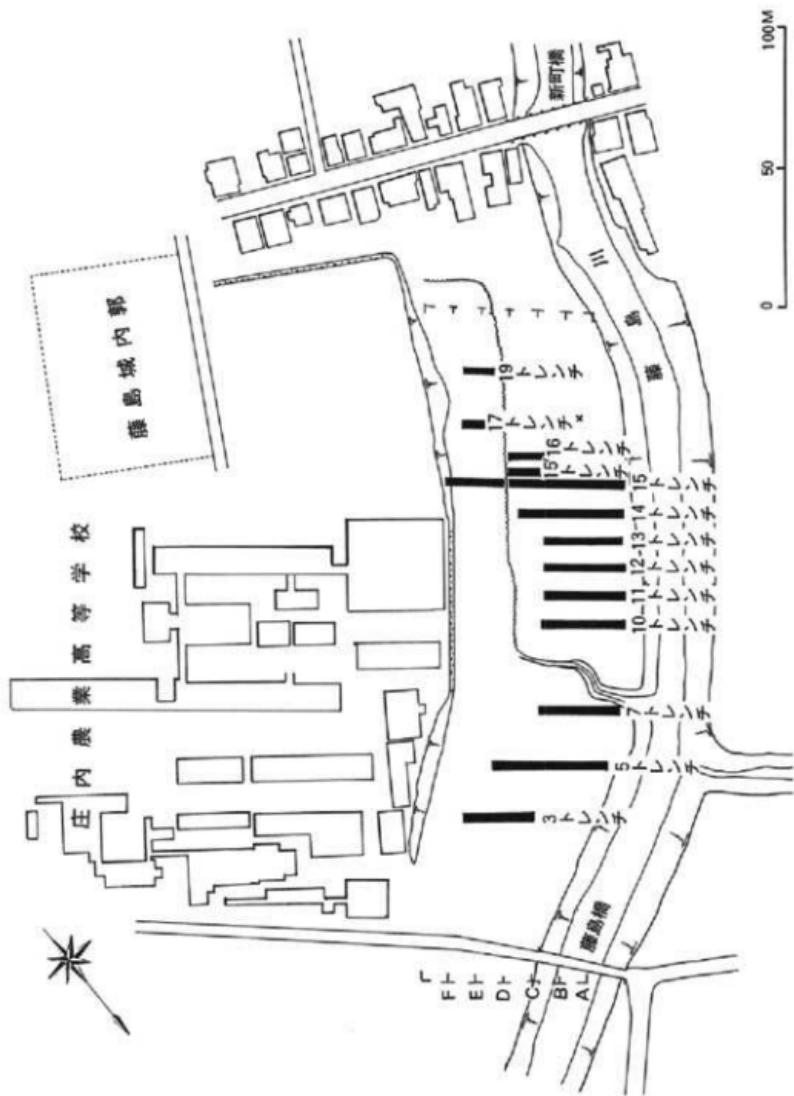
このあたりは少し増水すれば水浸しになり、数年に一度は庄内農高のグランドやテニスコートなど、あたり一帯が泥海のようになり水害に見まわれるという土地なので、遺構の検出などについては余り期待していなかった。ただ調査予定地のやや台地に近いところに高まりがあり、さらにその東側が「堀跡」ということなので濠跡の確認と遺物の検出、さらに内郭の現状についての測量に主眼をおいて6月23日より調査を実施した。

- 6月23日・24日 調査地一帯の草刈り及び伐根作業を作業員5名で行う。併行して10m間隔のグリッド設定のため杭打ちを行う。
- 6月25日 午後調査員2名、作業員12名全員現場プレハブに集結。諸注意の後作業開始。調査区内のごみ、木の根、草の整理を行いD-10区の試掘を実施する。午前中、藤島町教育委員会、庄内農高等のあいさつまわりを行う。
- 6月26日 雨降りであったが、15より11までトレーンチの粗掘りを重機で行う。
- 6月27日 10、7、5、3のトレーンチを重機によって粗掘り、15トレーンチA～Cの精査を実施する。藤島町長、助役等来跡。
- 6月28日・29日・30日 降雨のため作業中止。藤島川はかなり増水し調査地附近も水浸しになり、トレーンチ内はあたかも水濠のような状態となる。
- 7月2日 雨天のなか作業を行う。15トレーンチDより溝の部分を残してE～Gに伸ばし、台地裾部まで及ぶ。
- 7月3日 午前中雨模様。午後15トレーンチE～Gの精査。3トレ、17トレを新たに設定。15トレーンチD～Eより土壘を検出。
- 7月4日 16トレーンチD～Eより土壘を確認、3トレでも土壘を確認精査する。



第3図 藤島城内郭現況測量図

第4図 藤島城外郭西側地形図及びトレンチ・グリッド配置図

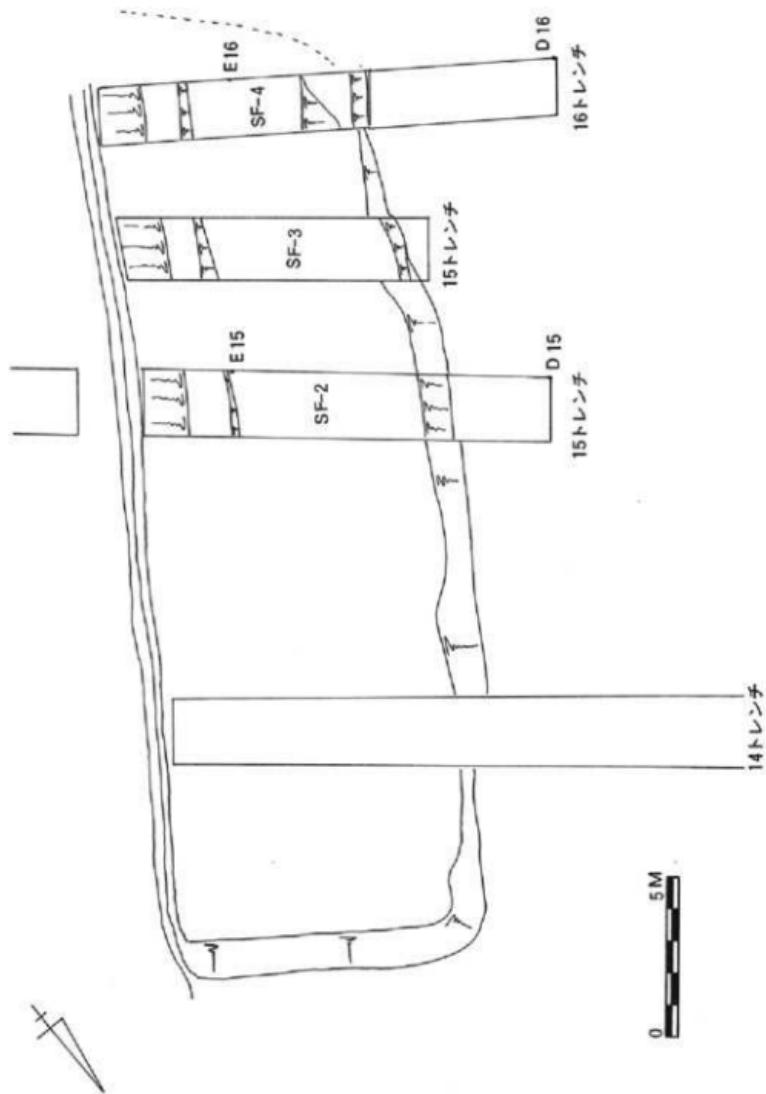


- 7月5日 15'トレD～Eより土壌を確認。17トレを設定し濠跡の有無を調査したが、顯著な濠跡は確認できず。16D～E土層断面図作製。15～16'トレ平面図作製。
- 7月6日 15トレD～G、14トレA～D土層断面図作製。19トレを設定して掘り下げる。  
藤島町教育長、阿部係長、山形新聞、莊内日報記者来跡。
- 7月9日 各セクションの注記、3トレの断面図作製。器材を整理し、あいさつまわりをして器材を運搬する。内郭の測量について打合わせ、内郭の写真撮影を行う。藤島城外郭西側の緊急発掘調査は、これをもって完了する。

調査地附近の標高は9.6m前後でかなり低い。これは内郭の大手門の附近の標高11.6mに比して2m低い位置にあり、藤島川にのぞむ低地に位置するので遺構の検出は不可能と考えられた。尚、念の為、川に向って幾本かのトレーンチを入れることにした。グリッド設定にあたっては新町橋寄りの方から藤島橋の方まで、北西—南東方向をX軸とし10mごとA～Gまで設定。東北—西南方向をY軸として03～01、1～21とし、グリッドの西隅を基点とした。（第4図・トレーンチ、グリッド配置図）新町橋寄りの低地は削平著しいので調査から除外した。Y軸線はN 39° 3' Eである。

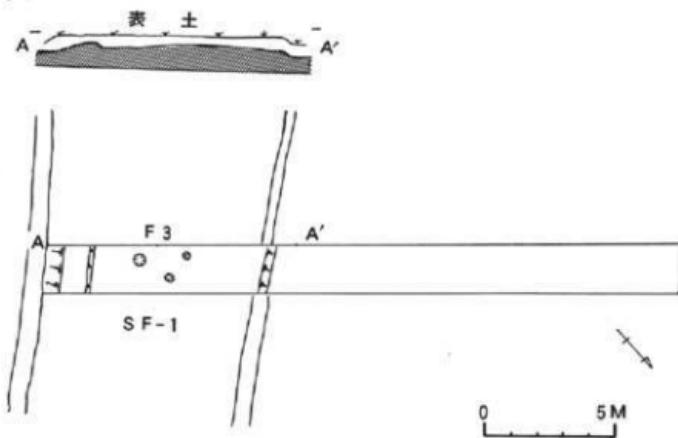
草刈りと樹木伐採作業を終った段階で調査地を観察すると、台地下より川に向って若干の傾斜がみられるが顯著なものではなかった。ただ14～16D区に周囲より約20及至30cmの高まりがあり、1～5E F区にも20cm内外の高まりが観取されたので、14トレーンチでその高まりの土層状態を把握することにした。3トレーンチから15トレーンチまで巾2m、長さ30～40mのトレーンチを川岸に向って9本重機を用いて設定したが、A区よりC区にいたるところは何れもさして土層変化がなく、川が運んできた土砂が厚く堆積しているのみであった。これは、どのトレーンチにおいても同様であった。このあたりは洪水のため毎年水浸しになるところである。なお土層断面図は14トレーンチのみ作成した。（第7図・各トレーンチ断面図）

ところがD区よりE区にかけて高まりをみせE区では数層にわたって土を盛り上げ、ところどころに粘土塊を混入したような人工的と思われる地業のようすが断面セクションより観察された。（第7図・各トレーンチ断面図、第5図・14トレーンチ平面図）これらは土壌の跡か人工的な築堤の跡と推定されたので、それらを確認するため15トレーンチ、16トレーンチ、さらにその間に15'トレーンチを設け精査を実施した。その結果、どのトレーンチからも土壌と思われる遺構を検出することができた。それらは表土を取り除くと、やや固く叩きしめられた状態であらわれる。15トレーンチ（S F-2）をみると土壌の巾は9.8m、高さは突端部のD区で60cmを測り、E区に入って一段と高まり80～90cmである。もっとも高い部分の巾は1.6m、この部分は明らかに土盛りを行い、粘土ブロックを入れてつき固め



第5図 藤島城外郭西側トレンチの土壁平面図

水平レベル: 10.3M



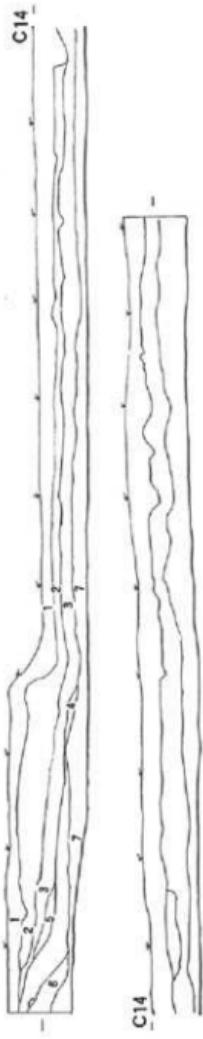
第6図 3トレンチ土壘 (SF-1) 平面図及び断面図

ているようすが土層断面の状態から観察される。土壘の東側は巾1m余の堰になり水が流れているが、ここに至って急に落ちこみ基底部に達する。このような状況はSF-3、SF-4についても同様である。土層断面よりみると、構築された土壘は巾2m程度のもっとも高い部分で階段状に前方に向って一段低くなつて張り出しが、この部分は自然堤防状の高まりを削り出してつくったもののように、巾16mにも及ぶ高まりをすべて盛土して構築したものとは思われない。土壘構築の状況については、14トレンチ土層断面図からもうかがうことができる。さいわいにも14より16区にかけて20乃至30cmの高まりが残っていたために、土壘の状況を良好な状態で把握することができた。

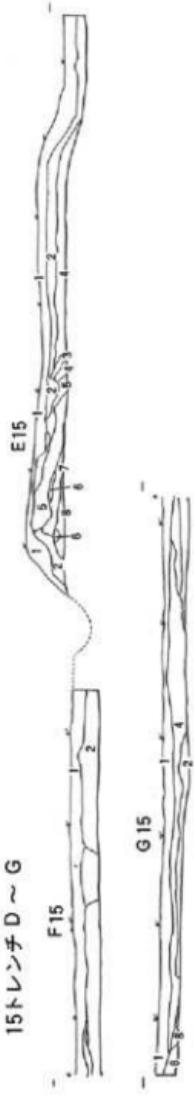
この土壘が部分的なものでなく外郭西側の藤島川との間に延々とつづくであろうことは推定できるが、なおそれを確かめるため14区より120m北の3区に3トレンチを設定した。この周辺も低いが、やはり高まりを残していた。予想通り、ここでもかなり上面が削られていたがSF-2よりSF-4までの状況とほぼ同じである。土壘の最高部は前者に比較して巾が狭いが、後世に削られた可能性がある。二、三のピットが検出されたが、内部より新しい陶磁器片が出土しているので最近のものようである。(第6図) このような土壘

第7図 各トレンチ断面図 (水準レベル：9.8M)

14トレンチA～D



15トレンチD～G



16トレンチD～E



#### 14トレンチ土層断面図の説明

土 層	説 明
1. 黒 褐 色 表 土	粘性ある腐植土
2. 暗 褐 色 砂 質 土	砂質土で粒子が細かい 草木根・木灰を含む
3. 黄 褐 色 砂 質 土	白粘土ブロックを含む
4. 黄 褐 色 砂 質 土	土墨の部分のみ粘土ブロックを含む 粒子がやや粗い
5. 黄褐色砂粘土混合土	粒子の粗い白色粘土ブロックを含み砂粒がやや粗い
6. 黄 褐 色 砂	純砂 粒子粗い
7. 黄褐色混砂粘性土	粒子が細かい

#### 15トレンチ土層質面図の説明

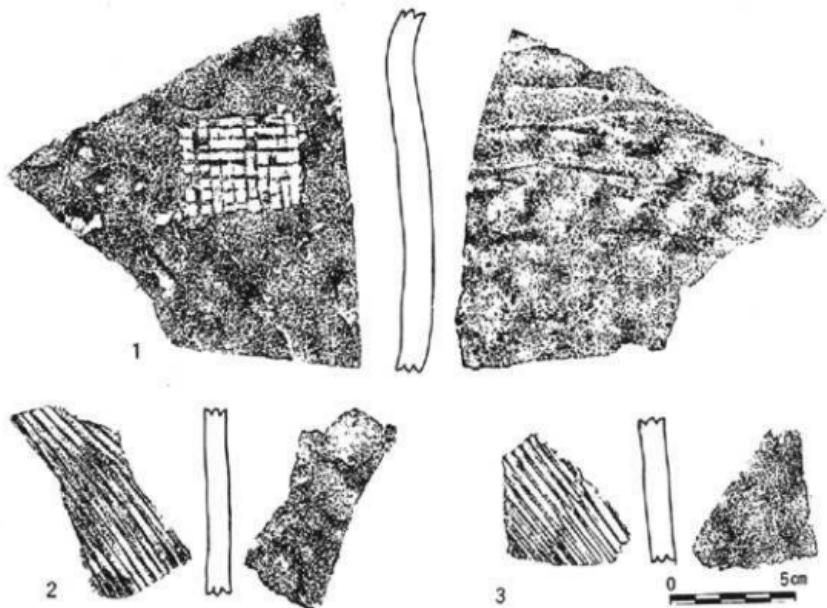
土 層	説 明
1. 黒 褐 色 表 土	腐 植 土
2. 黑 褐 色 土	若干砂粒を含み粘性である
3. 白 色 粘 土	僅かに砂を含むが純良である
4. 黑 褐 色 砂 質 土	粘性を帯び粒子がやや粗である
5. 明 褐 色 粘 性 土	白粘土ブロックを含む
6. 黄 褐 色 砂	粒子が細かい
7. 明 褐 色 粘 土	砂を含み白色粘土ブロックが入る
8. 黄褐色混砂粘性土	粒子がやや粗い

#### 16トレンチ土層断面図の説明

土 層	説 明
1. 黑 褐 色 表 土	粘性で粒子細かい
2. 黑 褐 色 土	粘性あり上部に粗痕多い 旧水田表土か
3. 黑 褐 色 砂 質 土	木炭片を含む
4. 黑 褐 色 砂 質 土	粘性あり 砂粒を含む

が藤島川に沿って、新町橋から藤島橋あたりに至るまで約250mにわたり西側外郭線を形成していたものと思われる。「筆濃餘理」にはこれらの事実が出ていないが、すでに明治初年にこれらのこととは不明な状態になっていたのであろう。

「筆濃餘理」によれば現在、庄内農高の校舎が建ち果樹園がある内郭外側の一段高位の段丘の土手下と新たに発見された土壘の間に濠跡があり、当時水田であったように記載がある。若しこの部分に濠があるとすれば、土壘はその用をなさなくなるわけである。土手下と土壘の間の巾は平均20mで、北側は庄内農高のテニスコートなどになっているが濠の有無を確認するために15トレンチを土手下までのばし、さらに17・19トレンチを設定した。その結果、明確な濠跡は検出されなかった。確かに土壘の最も高い部分より1m乃至1.2m低くなるが、表土より40~50cmで基盤層の黄褐色粘土層に達し、黒色有機土などが深く堆積している様子はどの層からも認められなかった。確かに、かつて水田であったらしいことは土層の状況からも推定できるが、濠跡とすることはできない。15及び17トレンチの下層上面より珠洲焼、越前焼、青磁などの陶磁器片が若干出土した。段丘下から土壘までの間は、細長く曲輪をなしていたのであろう。「筆濃餘理」の筆者は、やや低くなり水田になって細長くひろがる部分を濠跡と推定して記載したのであり、表面観察からすれば無理からぬことであった。



第8図 越前焼（上） 珠洲焼系中世陶器（下）の拓影

## 6. 出土遺物

出土遺物は土器・陶磁器類がほとんどで、他にSF-1の土壘上より真鍮製の簪が出土している。川に近いトレンチからの出土物は皆無で、15トレンチのE～G区、17トレンチ、19トレンチから主として出土しており、外郭土壘内側、つまりEよりGにいたる低い曲輪より出土したものが最も多い。15トレンチでは、2及び4層から出土している。

土器・陶磁器類は、すべて小破片である。土師器系の土器9点、須恵器系の陶質土器3点、越前焼1点、瓦質土器1点、素焼の白色を呈する土器1点、明代の青磁2点、明代の染付1点、古伊万里風の染付磁器2点、近代の磁器9点、不明の陶片2点、不明の磁器片3点がある。全部で30点余りで 660m<sup>2</sup>の発掘面積に比すれば、きわめて少ない。この度の調査地である外郭西側は、土壘造構より川にいたる部分は度重なる洪水によって運ばれた土砂が堆積していること、土壘内の曲輪は、最も多く遺物を出しているが日常的な生活空間ではなかったことが遺物が少ない理由であろう。

土師器系の土器は赤褐色や黄褐色を呈する酸化炎焼成で、いわゆる赤焼土器と呼ばれているものである。底部に糸切痕があり、ろくろ整形の痕跡が明らかである。壊の破片が多い。須恵器系の陶質土器は外面に条線状叩目があり、裏面無文である。珠洲焼系の中世陶器である。壺の底部と思われる破片があるが、底面静止糸切りで内面には黒く漆が塗されている。何れも表面は黒灰色、又は灰色を呈する。

越前焼は大甕の破片で外面、内面とも越前焼特有の茶褐色を呈し、外面に格子目状の印文があり内面に、つぎ目やなでの痕跡が認められる。厚さ 1.3cm である。青磁片は中国産で、ややすくすんだ黄緑色のガラス質の釉がかけられ貫入が認められる。明代の青磁と考えられる。明代の染付の小破片も出ているが、雲形の文様が描かれる。古伊万里風の磁器破片は、白色の釉があつくわけられ青味がかった黒色で文様が描かれるが不明である。他に瓦質や白色を呈する酸化炎の土器、小破片のため不明の陶磁器片がある。近代の磁器は、SF-1のピットやトレンチ上層より出土したもので、明治以降のものと思われる。（第8図及び図版13）簪は長さ17.5cmで真鍮製であるが先端は尖り、もう一方の端は耳かき状になっている。上部半分は彫金が施されている。SF-1より出土したが、近世のものと思われる。（図版14）

以上の出土遺物の年代は中世後半より近世にいたるものであり、藤島城の築造使用の年代に合致する。少量ながら珠洲焼、越前焼が出土したことは、本地域の中世後半の遺跡に共通している。中国産青磁や染付なども城内につながりを持つ遺物であろう。

## 7. 結 言

今次の調査は藤島城外郭西側のきわめて限られた部分の調査であるが、藤島城内郭が存在する段丘面と、その下位の藤島川の河岸にあたる低位段丘面との間を調査することにより 250m にわたって土塁がめぐらされ、さらにその内部には低い曲輪がつづくことが確認された。土塁は自然堤防状の土地を削って、その上に版築状に粘土などで固めながら構築されたようであり、藤島川の増水の際は堤防の役割も果したものと思われる。

その内部に濠があるように考えられていたが、濠は検出できなかった。土塁と上位段丘崖の間は、むしろ巾のせまい曲輪であった可能性がつよい。そして段丘突端にも土塁があったものと思われる。但し西側の状況しか把握できないので、自然の要害である藤島川に臨まない他の三方はこれと若干異なり、濠が存在した可能性がある。昭和7年、阿部正己が発見し昭和11年、西村真次らによって発掘された丸木船は、外郭東側の県道附近より出土している。阿部は東側の外濠があり廃船を埋めて街道をつくったと推定している。これが正しいとすれば外郭西側の藤島川に対するに、東側に外濠があったと考えられる。従って城郭の規模は南北 400m、東西 300m、南北に長い長方形の襤張りである。南北 60m、東西 40m の土塁と濠で囲まれた内郭のまわり、段丘上に土塁がめぐり、さらに段丘下に土塁がめぐらされ、その外側に西方は藤島川、東方は外濠があり、南北も沢や濠で区画されていたことは現地形の観察からもうかがうことができる。少なくとも「回」字状に 2 及至 3 重の濠、3 重の土塁がめぐらされ藤島川やその自然堤防を利用した、きわめて堅固な平城であったと推測される。

「筆瀬餘理」によれば、さらに北側に曲輪がのび土塁と濠で囲まれた部分があるが、この城跡の南側に位置する法眼寺裏や種耕院北に土塁や濠跡が残っているところをみると、南側にも曲輪が北側と対称形に延びる可能性がある。南北に長い城域をもつが、藤島川の対岸にも「向館」があって「金ノ郭」と称し金野治郎右衛門が所持していたと伝えられ、これらを周辺に配して一層堅固な平城を誇っていたのであろう。但し法眼寺裏の土塁については、藤島城とは別個の土佐林氏関連の館とする説もある。なお外郭西側からは、主として土塁の内側より中世後半の陶磁器類を出土した。これらは何らかの意味で、往時の藤島城に関連をもつものであろう。

### [引用参考文献]

- 安倍親任「筆瀬餘理」下巻、「川南廃城考・下」。(鶴岡市史資料薦蔵内史料集 3、昭和53年3月18日発行の複刻本を用いた)
- 藤島町「藤島町史・上巻」(昭和40年3月)
- 山形県教育委員会「山形県遺跡地図」(昭和52年3月)
- 阿部正己「山形県藤島町発掘の丸木船」(考古学雑誌27/7 昭和12年7月)



図版1 藤島城附近の航空写真（県立庄内農業高等学校提供）



図版2 藤島城の内郭（鳥居のところが大手門といわれる）



図版3 大手門と内郭北側土壘



図版4 内郭と西側土壘



図版 5 外郭西側発掘地の全景



図版 6 発掘調査の状況



図版7 SF-2、SF-3、SF-4の土壘



図版8 SF-2の土壘



図版9 SF-3の土壠



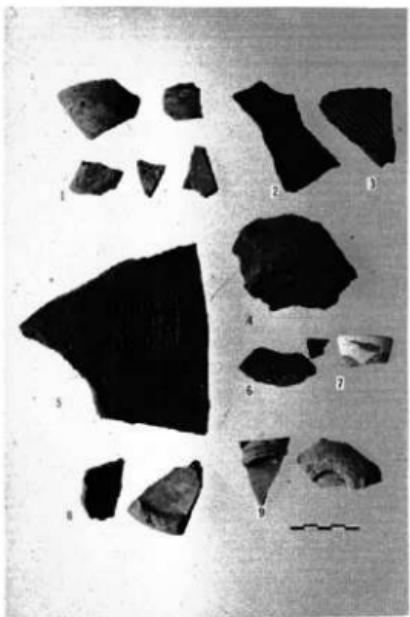
図版10 SF-4の土壠



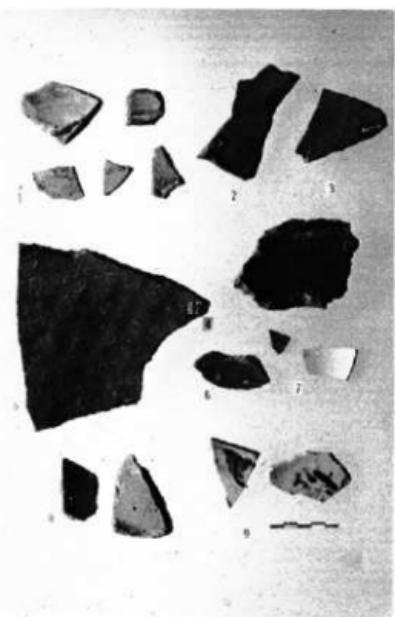
図版11 SF-1の土壌



図版12 法眼寺境内裏の土壌

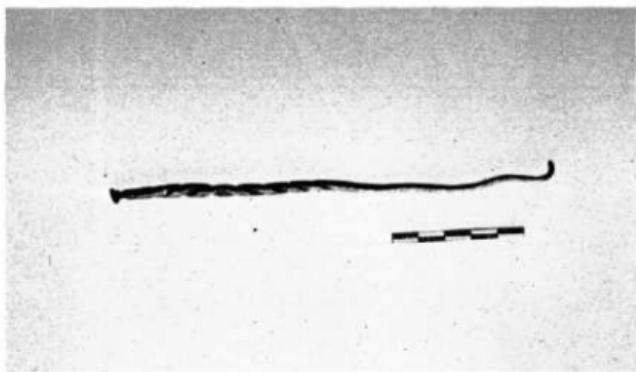


(表)



(裏)

図版13 出土した土器・陶磁器類



図版14 S F - 1 の土壙より出土した簪

---

山形県埋蔵文化財調査報告書 第25集

## 庄内藤島城跡

—河川改修にともなう外郭西側の  
緊急発掘調査—

昭和54年12月10日 印刷

昭和54年12月25日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社

---